

劉文英宝卷考

—附 SOAS 図書館所蔵宝卷目録—

砂 山 稔

序 言

吉岡義豊氏はかつて「宝巻という文学作品が中国民衆の意識や宗教思想をみるうえで、きわめて重要な資料であることは、ことあたらしく説明するまでもない」¹⁾と言われた。

筆者は沢田瑞穂氏の『校注破邪詳弁』を一読して以来、宝巻に関心を抱き続けてきたが、研究対象を唐以前に絞っていたため未だ実際に研究する機会を持たなかった。

ところが、1994年4月2日より、文部省在外研究員として渡欧、巴里を経て、倫敦大学 SOAS で4月22日より研究に従事した折、SOAS 図書館で31種の宝巻原本に接した。

その中で『劉文英宝巻』上下2巻は極めて稀覯に属するが如くであり、且つその梗概を同じくする『玉帯記宝巻』とともに明代の説唱文学との関連が指摘できるものである。

そこで劉文英宝巻考なる一文を草し、併せて SOAS 図書館所蔵の宝巻目録を附載することにした。博雅の君子の御叱正を切望する次第である。

第一章 宝巻の研究と資料の収集刊行

宝巻を本格的に文学研究の資料として取扱い、且つ38種の宝巻の提要を示して後の宝巻研究の基礎を築いたのは、周知の通り鄭振鐸氏の「仏曲叙録」²⁾である。

一方、この後、向達氏は「明清之際之宝巻文学与白蓮教」³⁾なる論文で、黄育榘の『破邪詳弁』に触れつつ、宝巻の持つ宗教資料としての価値に言及し、白蓮教との関係、即ち民間の宗教的秘結社との関連に注目した。

ただ、宗教資料として宝巻を見る場合、民衆に対する勸戒を内容とする点からこれを善書の一種とする見解もある。

ところで、塚本善隆氏は1951年に書かれた「宝巻と近代支那の宗教」⁴⁾の中で、説唱文学、即ち語り物としての宝巻に関する現況報告として「蘇州の某寺から京都に留学していた私の懇意な一青年僧は、今も蘇州の相当な家庭では、父母や祖父母の喜寿の賀や祖先の追善法要の時に、宣卷的を招いて宝巻を唱わしめることが行われていると語っていた」と叙べられているが、最近の鈴木健之氏の報告⁵⁾では、現在も江蘇省においては父母の長寿を願って『延寿宝巻』を講じて貰うなど語り物としての宝巻が民衆の生活の中に生き続けているとのことである。

さて、鄭氏の「仏曲叙録」以来、中国では宝巻の収集が行われ、それに基づいて書目等が作

1) 吉岡義豊『道教と仏教第三』の「中国民衆信仰の中の達摩大師」参照。

2) 鄭振鐸『中国文学研究』下に収録。

3) 向達『唐代長安と西域文明』に収録。

4) 「支那」を「中国」と改め、『塚本善隆著作集』第5巻「中国近世仏教史の諸問題」の中に収録。

5) 「生きていた語り物『宝巻』」(『東京学芸大学紀要』社会科学 第45集所収)。

成された。その中で重要なものは傅惜華氏の『宝卷総録』、胡士瑩氏の『彈詞宝卷書目』、李世瑜氏の『宝卷綜録』等であるが、就中、李世瑜氏の『宝卷綜録』は従来の書目を集大成し、未著録のものを整理したもので、中国内において知り得る範囲の宝卷は悉く記載されているとされる。

この『宝卷綜録』には李世瑜氏所蔵にかかる285種（版本408種）の宝卷も著録されているが、我が国の野口鐵郎氏に語ったところによれば、文化大革命の騒動の中で、すべて失われたという⁶⁾。

ただし、李世瑜氏が天津図書館に保存させておいた紅陽教善蔭堂などの教門の百種ばかりの宝卷は、文化大革命の際に失われたと思われたものが、1989年に同図書館で再発見され、それらの目録は濮文起氏の近著『中国民間秘密宗教』の中に付録として収載されてる。

一方、我が国では鄭氏の研究に刺戟されて、吉岡義豊、塚本善隆、沢田瑞穂、酒井忠夫、倉田淳之助の各氏が、道教・仏教・文学・善書・語学との関わりで研究を発表され、また井上紅梅氏や高倉正三氏のように、「仏曲叙録」を抄訳したり、宝卷を収集する人々も出た。

このうち、沢田瑞穂氏の『増補宝卷の研究』は我が国の宝卷研究の水準の高さを最も良く示したものと考えられる。

そこでは沢田氏は明清の宝卷を「原初宝卷時代・教派宝卷盛行時代・宝卷沈衰時代の三期約四百年は、通じていえば古宝卷時代である。」「嘉慶十年を一応の転機と見なし、それ以後、今日に至るまでの百数十年間を新宝卷時代とする」として、清の嘉慶十年（1805）を境にして、古宝卷と新宝卷に分け、更に宝卷提要には別録補遺を加えて200余種の宝卷の内容を紹介している。そこには沢田氏私蔵の宝卷だけでなく、京都大学人文科学研究所、倉田氏、吉岡氏、窪徳忠氏等の所蔵の宝卷も披閲された結果が記載されている。これに対し、相田氏は「国会図書館所蔵の宝卷について」⁷⁾の中で同館所蔵の40数種の宝卷を紹介され、沢田氏の『増補宝卷の研究』に未収録の6部について内容を紹介されている。

さて、次に欧米の図書館所蔵の宝卷については、前述の濮文起氏の『中国民間秘密宗教』には次のように説かれている。

除日本之外、苏联也是搜集与研究中国民间宝卷的主要国家之一。现存宝卷约26种，分别藏在苏联科学院东方学研究所列宁格勒分所和莫斯科国立列宁图书馆。其中有明刻珍本，如《普明如来无为了义宝卷》，《灵应泰山娘娘宝卷》等。宝卷研究成绩较为突出的是列宁格勒分所的司徒洛娃。1979年，她的专著《普明宝卷译注》问世，对宝卷的形成史，宝卷的研究史，宝卷与秘密宗教的关系史等方面，均作了阐述，其中不乏高见。最近，她又对列宁格勒分所新发现的《崇禎爷宾天十忠臣宝卷》（简称《崇禎宝卷》）进行考证，翻译，注释。

美国虽藏宝卷不多，但有些极珍贵的孤本，如普林斯顿大学图书馆有一种《销释佛说保安宝卷》。

このように濮氏はロシアのストラバの活動とアメリカのプリンストン大学図書館所蔵の宝卷等に注目する。しかし、他のヨーロッパ所蔵の宝卷には触れていない。

しかし、前述のようにSOAS図書館には、Library Catalogue of the School of Oriental and African Studiesの中のLiterature Pao-chüan Narrativesに記載される『劉文英宝卷』を含む30部の宝卷とFirst SupplementのBuddhistの中に記載される『花名宝卷』一部が収録されているのである。

6) 野口鐵郎『明代白蓮教史の研究』参照。この時、李氏は本当にそう思っていたらしい。

7) 『東洋学報』第64巻第3・4号所収。

第二章 劉文英宝卷について

第一節 劉文英宝卷と玉帯記宝卷

さて、SOAS 図書館所蔵の『劉文英宝卷』は、上下二巻で、民国 19 年（1930）、上海文益書局からの刊行である。沢田氏の「宝卷提要」にも、相田氏の指摘された国立国会図書館の宝卷目録にも見えないから、我が国では恐らく未見であろう⁸⁾。一方、胡氏の『彈詞宝卷書目』には、「劉文英寶卷 民国 13 年（1924）文益書局石印。（胡）」と記されており、李氏の『宝卷綜録』には、劉文英宝卷の條に、

| 番号 | 書名 | 巻数 | 年代 | 版 本 | 収蔵者 | 曾著录篇籍 |
|-----|-----|----|------|-------|-----|-------|
| 227 | 刘文英 | | 1924 | 文益 石印 | 胡、赵 | 书目、編目 |
| | 宝 卷 | 1 | 1932 | 朱彬記鉛印 | 李 | |

とあり、李氏もかつて一卷本鉛印の『劉文英宝卷』を蔵していたようである。しかし SOAS 本は李氏著録の胡、趙本に類して、刊行年を異にするものである。

劉文英とは見慣れぬ名であるが、実はこの劉文英が活躍する宝卷が『劉文英宝卷』とは別の名称で、沢田氏の「宝卷提要」にその梗概が著録されている。それが即ち『玉帯記宝卷』である。やや長い引用になるがその梗概を次に記して置く。

宋の仁宗のころ、河南運水県（今河南遂平）の劉文英は受験のため上京する途中、太行山で陸林という山賊に捕えられ、殺されかけたところを、陸林の娘の青蓮が救い、二人はひそかに結婚して一夜を契った。翌日、青蓮から無量瓶・温涼盞・碧玉帯という稀世の宝物三種を贈られて山を離れたが、揚二という男の経営する宿屋で、その宝物も路銀も奪われ、身は絞殺された。揚二はこの宝物の力で皇后の病を治して高官に任ぜられた。劉文英は冥府の判定で蘇生と決まり、屍骸は白馬に乗せられて開封府（今河南開封）に到着する。包拯がこの不思議な事件を扱って揚二の犯罪をさぐりあて、策略をもって揚二を役所に招いてこれを殺した。皇帝怒って包拯と劉文英とを罪せんとしたとき紅羅山の賊が叛して、これを劉文英が征した。賊とは文英の妻の青蓮が十数年前から独立した山賊で、賊首陸天保とは実に文英の子であったので、ただちに降伏した。包拯は龍図閣（今河南開封）閣学士に、文英は状元に、天保は保国將軍に、青蓮は忠義夫人に封ぜられ、また青蓮の父の陸林も招安に応じて山を下った。

『玉帯記宝卷』は具さには『繪図玉帯記宝卷』と称し、上海惜陰書局石印本 2 冊、2 巻で、民国 2 年（1913）の刊行であって、京都大学人文科学研究所の所蔵である。その名称は、劉文英が青蓮から贈られた三種の宝のうちの「碧玉帯」に由来するものであることは云うまでもなからう。そして、『劉文英宝卷』の粗筋はこの『玉帯記宝卷』と同様である。ただ両者は同一の系統に属する宝卷であるが、重要な相違もあり、単なる異本の域を越えているテキスト同志である。

第二節 三種の宝と『張文貴伝』

『劉文英宝卷』でも『玉帯記宝卷』と同様、無量瓶・温良（涼）盞・碧玉帯の 3 種の宝のことが説かれる。劉文英が揚二と逢う場合では次のように云う。

我妻送我三件寶，正是無價寶和珍，温良盞來無量瓶，瓶子一拍酒來臨，還有一个温良盞，

8) 近刊予定の『中国宝卷総編』には『劉文英宝卷』（中国所蔵のもの？）が収録されているとの情報を書肆より入手している。

九天仙女唱曲文，還有一条碧玉帶，許多寶貝在其身。(卷上，第五紙裏)

劉文英が青蓮からこの三種の宝を贈られる場面では，それぞれの宝の機能についてより詳細に述べている。

即忙又將箱籠開，又拿無價寶和珍，第一送你無量瓶，揜手一拍酒來臨，第二又送温良盞，此盞又是無價珍，飲起酒來又歡樂，九天仙女唱曲文，第三又送一玉帶，也是無價寶和珍，病人記了病就好，死人記了又還魂，老人記了轉少年，少人記了長精神。(卷上第四紙裏)

この三種の宝のうち碧玉帶は病人を癒し，死者も甦らせるのであるから至宝中の至宝である。

ところで、『玉帯記寶卷』に見える三種の宝の物語について，大塚秀高氏は論文「包公説話と周新説話」⁹⁾において，明の成化説唱詞話の中の『張文貴伝』に触れて次のように述べる。「『張文貴伝』は『包待制智賺生金閣』雜劇に類するが，恐らくは元・明間無名氏による包待制賺三件寶(『玉帯記寶卷』では主人公は劉文英)と同話であろう。」と。

周知のように，1967年に上海市近郊嘉定県の明代墳墓中から発見された明の成化年間(1465—87)刊行の『花関索伝』を含む11冊の説唱詞話は中国俗文学研究史上の貴重な資料である。そして，この成化説唱詞話の中には北宋の仁宗時代の名裁判官とされる包拯に関わる8種の説唱詞話がある。「太祖太宗真宗帝，四帝仁宗有道君」とはこの包拯の説唱に関する極文句であるが，先の『張文貴伝』は実にこの二句を冒頭に掲げている¹⁰⁾。この『張文貴伝』は具さには『新刊全相説唱張文貴伝』(封面に『包龍圖公案詞話』と題す)と称する上下2巻の書で，莊司格一氏は『中国の公案小説』の中で，その粗筋を次のように紹介している。

張文貴が東京に試験をうけにゆく途中，静山大王につかまり，あわや殺されかけるが，大王の女，青蓮公主にたすけられて夫婦となり，三つの宝物，返魂できる青絲碧玉帶，たたけば酒がみちるといふ逍遙瓶，酒をのむとき音楽をかなでる温涼盞を与えられて都にのぼる。これに目をつけた楊二に殺される(巻上)。時たまたま太后が重い病気になる，癒したものには高位を与えるという。楊二は奪った宝物をもって京にゆく。果して太后の病気は忽ちよくなる。官を与えるとき，包公はその人相を見，うけあえない，というが，太后の口ぞえがあつて元帥とする。一方，張文貴の無実の叫びが玉帝にきこえた。尸をあらわし驢馬にのせて包公のもとにとどけた。包公は楊二のもっている三つの宝物をおもいだし，夫人が重病で，といつわつて青絲碧玉帶をかりて文貴を生き返らせた。その訴状により楊二はとらえられ，処刑される。静山大王に詔がくだされて天子に拜謁する。文貴は青蓮とともに朝恩を蒙り元帥となる。(巻下)

このように『張文貴伝』は、『劉文英宝卷』『玉帯記寶卷』と同じプロットを持っているのである。但しそのディテールは少しく違っており，その幾つかを整理すると次の如くである。

| | 『張文貴伝』 | 『劉文英宝卷』 | 『玉帯記寶卷』 |
|------|---------|---------|---------|
| 主人公 | 張文貴 | 劉文英 | 劉文英 |
| その妻 | 青蓮(蓮)公主 | 青蓮 | 青蓮 |
| その父 | 張百万 | 劉百万 | 劉百万 |
| その母 | ? | 黄氏 | 黄氏 |
| 出身地 | 西京溪水縣 | 河南運水縣 | 河南運水縣 |
| 太行山主 | 静山大王趙大保 | 陸林 | 陸林 |
| その子 | | 劉天保(宝) | 劉天保 |

9) 『東方学』第66輯所収。

10) 沢田瑞穂『宋明清小説叢考』の「四帝仁宗有道君」を参照。

次に『張文貴伝』における三つの宝についての叙述も示して置こう。

青連收拾金和宝，便開箱子取金銀，取出三般无價宝，将来付与丈夫身，第一青絲碧玉帶，正是希奇无價珍，若是死人來帶了，三竈六鬼再臨身，病人將在腰中繫，四百四病尽除根，若是老人來繫了，便如二八後生能，若是醜人來繫了，一身容兒甚超群，第二一般无價宝，名号逍遙无尽瓶，若把此瓶來一拍，滿々尖々酒一瓶，早晨吃到齋時候，齋時吃到夜黄昏，才逢吃罷筵席散，即時吃了並無星，第三一隻温涼盞，此宝人間无價珍，不吃酒時全无事，才吃之時樂器鳴，笙簫細樂般々響，諸般樂器振吟々，落盞还基无一滴，筵中不見樂声鳴。（卷上，1686p）

成化説唱詞話が発見された際、趙景深は「淡明成化刊本『説唱詞話』¹¹⁾なる一文を表わしているが、その中の『張文貴伝』に関するところでは、「这故事比较陌生，其中有张文贵赶考，投宿客店，与店主杨都知饮酒，店主为了谋取三件宝贝，绞死张文贵等情节。『福建戏曲传统剧目索引』第五册113页有莆仙戏『张文贵』的梗概，与説唱词话『张文贵传』略同。」と記している。莆仙戯には継承されているものの、趙景深が「陌生（見慣れない）」と評した張文貴の故事の中の最も顕著な部分である三つの宝のことは、青絲碧玉帶・逍遙无尽瓶・温涼盞から碧玉帶・無量瓶・温良（涼）盞の形のまゝ、莆仙戯のような戯曲だけでなく、『劉文英宝卷』『玉帶記宝卷』の如き宝卷文学へも継承されていたのであった。

第三節 還魂と三魂

さて、『張文貴伝』では、張文貴から三つの宝を奪った楊二が仁宗にその宝を手に入れた方法を聞かれ、次のように答える件がある。

楊二此時從頭奏，伏惟至上納微臣，家住東京開封府，竹竿巷内長生身，自小姓楊名幾二，積祖都知店主人，爹爹侍奉神仙法，得賜三般无價珍，聞得我王張黃榜，上説娘々患病因，小人特進三般宝，要救娘々太后身。（卷下，1698p）

これは『張文貴伝』の作者が、青絲碧玉帶・逍遙无尽瓶・温涼盞を道教的なものとして看做していた証左であり、引いては『張文貴伝』や『劉文英宝卷』に現れている濃厚な道教色の存在を説明するものであろう。事実、『張文貴伝』では、張文貴の読書遍歴を説明する中に「葛洪三卷腹中の心」と『抱朴子』の書で知られる晋の道士葛洪の名すら挙げているのである。

この『張文貴伝』では、青絲碧玉帶による還魂を説く場面で三魂七魄説に触れるところがある。

第一青絲碧玉帶，此宝希奇无價珍，病人把来腰内繫，四百四病尽除根，死人若把腰間繫，三魂七魄再还魂。（卷下，1698p）

この三魂七魄説は、先の葛洪の『抱朴子』内篇に初めて見える¹²⁾。

抱朴子曰，師言欲長生，勤服大藥，欲得通神，當金水分形，形分則自見其身中之三魂七魄，而天靈地祇，皆可接見，山川之神，皆可使役也。（卷十八，地真篇）

『張文貴伝』では、他方「三竈六鬼再臨身」（卷上，1686p）、「三魂七鬼再臨身」（卷下，1713p）とも書かれているが、これは「三魂七魄」とあるべきものであろう。

事実、北宋の真宗時代の道蔵をダイジェストした、張君房の『雲笈七籤』では、巻54・55の両巻を割いてこの三魂七魄説について詳述しているのである。

夫人身有三魂，一名胎光，太清陽和之氣也，一名爽靈，陰氣之變也，一名幽精，陰氣之雜

11) 『文物』1973年第1期所収。

12) 藤野岩友『中国の文学と礼俗』の「『雲笈七籤』に見える三魂七魄」参照。

也，若陰氣制陽，則人心不清淨，陰雜之氣，則人心昏暗，神氣闕少，腎氣不續，脾胃五脉不通，四大疾病係體，大期將至焉。（卷五十四）

其第一魄，名尸狗，其第二魄，名伏矢，其第三魄，名雀陰，其第四魄，名吞賊，其第五魄，名非毒，其第六魄，名除穢，其第七魄，名臭肺，此皆七魄之名也，身中之濁鬼也。（卷五十四）
ところで、この三魂七魄の語が初めて現われる『抱朴子』では、人の魂魄と病いや死との関係について次のように述べている。

人有賢愚，皆知己身之有魂魄，竈鬼分去，則人病，盡去，則人死，故分去，則術家有抱録之法，盡去，則禮典有招呼之義。（卷二論仙篇）

ここに招呼とあるのは、死者の魂を呼び返す方法として古来から行われた「招魂」の法に関わることであり、抱録の法とは、即ち『雲笈七籤』に詳述される「抱三魂法」「制七魄法」等の動揺する三魂・七魄を身の中に抱制して置く方法である。

但、『張文貴伝』では、三魂七魄説に関して『雲笈七籤』のような詳細な記述がある訳ではなく、むしろ『抱朴子』論仙篇のように、魂魄が尽く人の身体を去れば死が訪れると考え、三魂七魄が「再び身に臨め」ば、それが「還魂」であり、つまりは再生であると考えたものであろう。そしてこの三魂七魄が再び身に臨むために、青絲碧玉帯が極めて重要な役割を附与されていたのである。

明代において「還魂」の事を扱った俗文学としては、周知の如く万曆時代（1573—1620）に活躍した湯顯祖の『牡丹亭還魂記』が知られるが、『張文貴伝』はその還魂の方法の特殊性で独自の位置を占めるのであろう。

ところで、『劉文英宝卷』では、碧玉帯による「還魂」について、例えば、劉文英が楊二に殺される直前の場面で、

説起這條碧玉帶，有多少好處，我來說的聽了，老人記了轉少年，少年記了長精神，病人記了病就好，死人記了轉還魂。（卷上，第六紙表）

と述べ、また、一旦死んだ劉文英が再生する場面で、

包公忙把堂來坐，叫聲張龍趙虎身，快將死首來抬出，玉帶記在他當身，不多一刻茶時候，（劉文英）悠悠嘆氣轉還魂，一連几聲來立起，口中便罵楊二身。（卷下，第四紙裏）

と語る通り、単に「還魂」を繰り返すのみである。因みに『玉帶記宝卷』では「還魂」とともに回魂（回魂）の語が見える。

しかし、一方で、恐怖を示す表現として、

宋王天子心中怕，滿朝文武失三魂。（卷下，第七紙裏）

口内説來脚下走，太太一見失三魂。（卷下，第四紙表）

と「三魂を失う」などの記述がなされており、また、包拯が死を装う場面では、

兩個醫官來訪脉，唬只三魂失二魂。（卷下，第四紙裏）

宋王天子聽了説，唬了三魂失二魂。（卷下，第四紙裏）

という如く、「三魂，二魂を失う」などの表現もなされている。

因みに先の『雲笈七籤』では、

每本命日，一魂從本宿降下，二魂雖非巡次，其日亦隨從母魂。（卷五十四）

と、三魂の中の一魂と他の二魂が分離して行動することが説かれている。

そして、いずれにしても、『劉文英宝卷』では、人間の魂は詳しく見れば、胎光・爽靈・幽精のような三魂が生動している姿が健全な状態であると考えられており、先の「還魂」もこのような魂の帰還を内容としていたと理解して良いものと思われるのである。

第四節 道教神のことも

さて、『劉文英宝卷』には、玉皇大帝を始めとして様々な道教神が登場し、この宝巻を道教的宝巻と呼ぶにふさわしい雰囲気醸し出している。一方、元となった『張文貴伝』でもやはり道教神が登場するが、双方に登場する道教神には際立った相違が見られるようである¹³⁾。

『劉文英宝卷』では、まず劉文英の父母の劉百万と黄夫人が子供の誕生を神に祈り、それに応えて玉皇大帝が太白星君と文曲星君を派遣し、太白星君が齎した仙桃により劉文英が誕生する。これは『張文貴伝』には全くない場面である。

玉皇大帝心歡喜，快賜香烟接後成，太白星君聽只説，領只玉旨下天門，文曲星君歸下界，送到劉家做子孫，（中略）太白星君聽了説，領只玉旨下天門，下了三十三天界，手捧仙桃下凡塵，先到西京河南府，再送金童去投生。（卷上，第一紙裏）

一方、太行山の陸林の妻の呉氏は、太白星君の齎した仙桃により、玉女青蓮を受胎する。

不宣員外家中事，再宣太行山上人，姓陸名林一草寇，稱孤道寡自為尊，有个妻了呉氏女，夢見仙桃落凡塵，夫人看見仙花朵，双手捧花挿耳門，太白星君歸上界，交過玉旨在天門。（卷上，第一紙裏）

三柱の道教神のうち、玉皇大帝は、云う迄もなく北宋以降の道教の最高神で、北宋の真宗の大中祥符7年（1014）には「太上開天執符御歷含真体道玉皇大天帝」の尊号を贈られている。この玉皇大帝は隋唐時代までの最高神である元始天尊にとって替ったもので、また天公・玉皇・玉帝・玉皇上帝などとも呼ばれる。因みに言えば、『玉帯記宝巻』では玉皇大帝は登場しない。

次に太白星君は、惑星の金星を神格化したもので、白帝の子とされ、道教では当初は女性神とされたが、明代以後は白髪慈顔の老人として形象され、玉皇大帝の使者がその役割である。

また文曲星君は、北斗の第4星の文曲星が神格化されたもので、インテリゲンチャに信奉される道教神であるといわれる。

ところで、大塚秀高氏は、仁宗の誕生説話、即ち赤脚大仙転生説が『水滸伝』引首、40回本『平妖伝』第14回に記されることに触れ、また同様の話が『新刻五鼠鬧東京包公収妖全伝』第1回冒頭にも載せられるとし、『五鼠鬧東京』の話を次の様に要約される¹⁴⁾。

「真宗の求嗣の願いを耳にした玉帝は、諸仙に下凡するものを求める。赤脚大仙が大笑してこれを承け、李宸妃の腹に投胎する。月満ちて生まれた仁宗は生後三日たっても泣き止まない。これを聞きつけた太白金星が玉帝と掛け合い、輔佐として文曲星武曲星を包拯、楊文廣として下凡させることとし」た云々。

こうした説話から考えて、『劉文英宝巻』の文曲星君も、この宝巻における包拯の活躍との関わりで登場しているものであろう。

因みに『劉文英宝巻』では、太白星君の仙桃によって生まれたとされる劉文英と青蓮は同年同月同日同時に誕生する。この趣向は『張文貴伝』でも同じであり、重要な事柄として繰り返される。

我年紀，十六歲，八月初二，子時生，生下我，名叫文英，小佳人，聽只説，真正歡喜，你十六，我十六，相配年庚，天配成，我二人，婚姻和合，又同年，又同月，同日同時，叫一聲。（『劉文英宝巻』卷上，第四紙表）

13) 以下の道教神のことについては、窪徳忠『道教の神々』、黄海徳・李剛『簡明道教辞典』（これは同種の著作としては出色のものである）の記述も参考にした。

14) 大塚氏前掲「包公説話と周新説話」参照。

(張文貴) 孛生今年十八歳，正月十五子時生，公主听得心歡喜，此事僥倖世罕聞，你是正月十五養，我是元宵月半生，同年同日又同日，又同生下合時辰。(『張文貴伝』卷上，1683p)
但、『劉文英宝卷』では、8月2日が誕生日とされているが、『張文貴伝』では、既に見たように、正月十五日、即ち、道教の重要な祭日の三元日のうち、上元の日が選ばれてる点が注目される。

この他に『劉文英宝卷』に登場する道教神としては、温良蓋によって現われる九天仙女と、冥界の王たる閻君(閻羅天子)等が居る。

このうち、九天仙女は、或いは九天玄女と関わりがあるのであろうか、九天玄女は周知の通り黄帝の師ともされ、西王母に次ぐ有力な女仙で、『靈宝五符』や『陰符経』などの道教経典の伝授に関わる伝説にも登場する。ただし、『玉帯記宝卷』では「九个仙女」としている。

また、閻君(閻羅天子)は云う迄もなく仏教における冥界の王であるが、『劉文英宝卷』では、次のような形で登場する。

文英聽說高聲叫，罵聲楊二瞎眼人，我在你樓來看寶，你來同我飲盃巡，把我吃得醉薰薰，手拿麻繩上樓門，你妻再三來求你，放了正屍見閻君。(卷下，第七紙表)

この閻君と同様の冥界の主は、『張文貴伝』では陰君として登場する。即ち楊二(都知)が張文貴を殺害する場面に次のように云う。

都知當時心發怒，攔喉纏住姓張人，便把九節簫一管，當時絞倒地中心，鼻孔耳中鮮血出，一条性命赴陰君。(卷上，1693p)

因みに、『張文貴伝』では、鄴都大王(王子)などと呼ばれる者が登場するが、鄴都は云う迄もなく泰山地獄と並ぶ道教の代表的な地獄の名である。

この外に『劉文英宝卷』では、都市の神である城隍神、雷の神である五雷、そして土地神などが登場する。

これに対して、『張文貴伝』では、玉皇大帝、陰君の外に、老君(太上老君)、観音、風伯、雨師、雷公、電母の名が登場するが、総じて言えば、『劉文英宝卷』に登場する道教神の方が、より新しく、その活躍がよりヴィヴィッドであると言える。

第五節 白馬の活躍と『白馬宝卷』

さて、『劉文英宝卷』の今一つの顕著な特徴は、白馬が活躍することである。

この白馬は、劉文英が三つの宝とともに青蓮から与えられたものであった。

三件寶貝來送你，又送白馬長精神。(卷上，第四紙裏)

この白馬が劉文英の再生と楊二の罪の暴露に決定的な役割を果たし、包拯の活躍を助けるのである。それは劉文英の死屍を枯井から白馬がその背中に載せて包拯の目前に現われる重要場面に次のように描かれている。

自從文英來害死，白馬日月望主人，不知主人那方去，常在園中望主人，白馬朝天只一吼，立刻困在地中存，玉皇大帝來知道，曉只文英有難星，玉皇大帝忙傳令，急差五雷下天門，先是青天明明白，後來連連起風雲，東南一塊烏雲起，西北一塊星云生，格林一聲京人胆，枯井打只碎紛紛，就把死屍來提出，搭在白馬身上存，城隍土地扶尸首，白馬一去出園門，大街三市人看見，人人看見稱奇文，盤古到今千萬載，那見白馬駝死人，白馬不往別方去，只到開封府衙門，一直到大堂上，跪在大堂上面存，張龍趙虎心害怕，急急忙忙報大人，報到大人不好了，白馬駝了一死人，包公聽說心中想，立刻傳班把堂井，公堂一拍京人胆，走下清官包大人，包公坐在大堂上，就拿白馬審分明，云々。(卷下，第二紙裏—第三紙表)

この白馬の活躍に当って、玉皇大帝が大いに援助していることも同時に見逃せない。『劉文英

宝卷』では、劉文英・青蓮の誕生と劉文英の再生に玉皇大帝が重要な役割を演じていることはその特徴の一つなのであり、この宝卷を道教的宝卷と看做す所以でもあるのである。

ところで、『張文貴伝』でも、やはり、馬が張文貴の再生に大きな役割を果たしており、ここで玉皇大帝も登場する。しかし、それは白馬ではなく「龍駒馬」である。「龍駒馬」の活躍を描く場面は相当に長文に亘るのであるが、ここでは張文貴の尸霊を背に包拯の前に現われる部分を抜き出す。

再唱彪駒馬事因，看見天光晴明了，依然來到後園門，却見秀才張文貴，兩行珠淚落紛々，你在北間身死了，家中父母望回程，口咬衣裳只一挾，駝其背上便行呈，即時跳出南牆去，長街上面走如云，滿街男女齊來看，人々看見卓然驚，這個畜生無道理，因何背着死尸靈，一呈來到開封府，馬兒直入府廳門，廳上公人齊來打，畜生因甚背尸靈，眾人趕打々不出，一程奔入相公廳，尸靈撇在案卓下，拜在廳前不起身。(卷下，1704p)

南方熊楠は『十二支考』¹⁵⁾の「馬に関する民俗と伝説」の中で「紺青馬の色はあり得べからぬようだが、これはもと歐亜諸国に広く行わるる白馬を尊ぶ風から出たらしい。白馬が尊ばれる理由は、多般だがその一を述べると、明の張芹の『備辺録』に、兵部尚書齊泰の白馬極めて駿し、靖難の役この馬人の目に立つとて墨を塗って遁げたが、馬の汗で墨が脱ちて露顕し捕われたとある通り、白馬は至って人眼を惹く。したがって軍中白馬を忌む。しかるにまた強いと定評ある輩がこれに乗ると、同じく敵の眼に付きやすく戦わぬ内に退いてしまう。(中略)この理に由って白馬は王者猛將の標識に逃え向きの物ゆえ、いやしくも馬ある国には必ず白馬を尊ぶ」(圈点は筆者)と云う。

『張文貴伝』の龍駒馬は、このように人眼を惹く白馬にその活躍を際立たせる為に置き換えられたのに相違あるまい。また『玉帯記宝卷』では、その巻頭部分で「一本白馬馱屍記、文英劉氏把名標」と白馬の活躍を予言している。

更に『劉文英宝卷』では、その下巻の末尾に

此本名為白馬卷。(卷下，第八紙裏)

と述べて、『劉文英宝卷』に先立って『白馬宝卷』の存在のあったことを述べている。

因みに李世瑜の『宝卷綜録』では、『白馬宝卷』について、

| 番号 | 書名 | 巻数 | 年代 | 版本 | 収蔵者 | 曾著録篇籍 |
|-----|------|----|-----|-------|-----|-------|
| 009 | 白馬宝卷 | 2 | 清康熙 | 榮盛堂刊本 | 傳 | 兌録 |

と記すが、その傳惜華の「Catalogue des Pao-Kiuan 宝卷綜録」¹⁶⁾では、『白馬宝卷』について次のように述べている。

白馬寶卷二卷

作者無考。此書未見著録。書名標日：“新刻白馬寶卷”。清康熙間金陵榮盛堂刻本。線装，一冊。碧蘂館藏。

近年の活発な宝卷刊行の実際を見ても『白馬宝卷』刊行の予定が見られないのは残念であるが、三つの宝と馬の活躍を骨子とする物語は明・清・民国にかけて、

『張文貴伝』→『白馬宝卷』→『劉文英宝卷』・『玉帯記宝卷』

という形で語り継がれていったものと推定されるのである。

15) 『十二支考』(上)の引用は岩波文庫本によった。

16) 巴里大学北京漢学研究所刊。

結 語

さて、今までは『劉文英宝卷』の内容について、紹介を兼ねて、成化説唱詞話の中の『張文貴伝』と対照しつつ検討を加えてきた。この両者は同じく説唱文学の中の包拯の登場する公案ものに属するのであるが、宗教との関わりという点に注目すると玉皇大帝の権威を承認し、還魂（再生）というモチーフを持つ道教文学であると言うことが出来よう。そして、三つの宝と馬の活躍がその中で重要な位置を占めたのであった。

しかし、この両者の刊行された時期を比べると、明の成化年間（1465—87）と民国19年（1930）との間にはほぼ450年以上の歳月が流れている。両者に登場する道教神の相違は、一つにはこの時代の流れによる変化に帰することが出来よう。

だが一方で、主人公に「我は是れ孔聖門下の讀書の人」（巻下、1714p）と語らせる『張文貴伝』の書き手と、劉文英の親が子授けの為に「仏を拝し神に求め」（巻上、第一紙表）たとし、また「繫」を「記」、「驚」を「京」と表記する『劉文英宝卷』の書き手との間には、正統的な儒教と庶民的な仏教に対する態度、更には教養の差のあることは否定すべくもないであろう。つまり、書き手に社会階層の差が認められるということである。そしてそれはまた、二つの道教文学の間のイデオロギー配置の相違をも示しているのである。

但、『劉文英宝卷』と『玉帯記宝卷』との相違については、幾つかの点を気のつくままに記して置いたが、意外に大きな問題を含むようであり、今少し資料が揃った時点で改めて論じることとしたい。

最後に触れた『白馬宝卷』は清の康熙年間（1662—1722）の刊行とて、時代的には両者の中間に位置し、沢田氏の分類でも古宝卷に属するのであるが、それを目にする機会のあることを期待しつつ、今は擱筆する。

SOAS 図書館所蔵宝卷目録

- 1) 繪圖珍珠塔寶卷全集 一冊 巻首・版心「珍珠寶卷全集」, 見返「繪圖珍珠塔寶卷全集」。宣統紀元（1909）, 杭州聚元堂石印。
- 2) 秀女寶卷全集 一冊 巻首「山西平陽府平陽郡秀女寶卷全集」, 版心「秀女卷」, 題簽「秀女寶卷全集」。光緒34年（1908）重刊, 瑪瑙經房。〈備考〉巻後に「安土咒」「搜箭呪」を付す。
- 3) 雪梅寶卷 二巻 二冊 版心・見返「雪梅寶卷」, 民国3年（1914）出版, 三官堂。
- 4) 雪山太子寶卷 二巻 二冊 巻首「雪山寶卷全集」, 版心・見返「雪山太子寶卷」, 題簽「繪圖雪山太子寶卷」。
- 5) 繪圖還金鑄寶卷 一冊 又名「魁星寶卷」, 版心「魁星寶卷」, 見返「繪圖還金鑄寶卷」, 上海借陰書局發行。巻首より2頁欠。〈備考〉巻後に「本局最近出版各種寶卷目録」として32種の寶卷名を載す。それは『落金扇』『珍珠塔』『麒麟豹』『雙釘記』『李三娘』『殺子報』『蝴蝶盃』『玉連環』『晚娘』『何文秀』『趙五娘』『生死牌』『劉香女』『孟姜女』『黃糠』『賣花記』『黃慧如』『蘭英』『百花台』『還金鑄』『回郎』『玉蜻蜓』『梁山伯』『延壽』『秦雪梅』『雙鳳』『梅花戒』『龍圖』『香山』『白蛇傳』『花綯卷』『龍鳳鎖』の各寶卷である。
- 6) 回郎寶卷全帙 一冊 附, 七七寶卷・嚶素（齋）經・花名寶卷・〔法船經〕。巻首「江南松江府華亭縣白沙邨孝修回郎寶卷」, 版心「回郎寶卷」。
- 7) 紅樓鏡寶卷 二巻 二冊, 巻首「新出繪圖金枝寶卷上集 又名紅樓鏡」, 版心・見返「紅樓鏡寶卷」。
- 8) 繪圖如意寶卷上集 一冊 巻首「如意寶卷」, 版心「如意寶卷上集」, 見返・題簽「繪圖如意寶卷」, 上海借陰書局發行。〈備考〉表紙上部に「宣講歡善民間故事」とする。
- 9) 梁皇寶卷全集一卷 一冊, 巻首「梁皇寶卷全集」, 版心「梁皇寶卷」 附, 十骷髏, 上大人詩注, 光緒2年（1876）, 杭州瑪瑙經房印造。〈備考〉巻後に寄進者の名を記載する。

- 10) 梁皇寶卷全集，一卷 一冊，卷首・版心「梁皇寶卷全集」附，十骷髏，上海道德書局印行。
- 11) 梁山伯祝英台全本，二卷 二冊，卷首「繡像梁山伯祝英台夫婦攻書還魂團圓記」，版心「梁山伯」，上海槐陰山房。
- 12) 劉香寶卷，二卷 二冊 卷首「太華山紫金鎮兩世修行劉香寶卷全集」，版心「劉香寶卷」。
- 13) 劉香寶卷 一卷（卷上のみ）一冊，卷首「太華山紫金鎮兩世修行劉香寶卷全集」，版心「劉香卷」，見返「劉香寶卷」，同治9年（1870），上海翼化堂藏板。
- 14) 劉文英寶卷 二卷 二冊 卷首・版心・見返「劉文英寶卷」民国19年（1930）出版，上海文益書局。
- 15) 花柳良願龍圖寶卷 一卷 一冊（卷下のみ），卷首「花柳良願龍圖寶卷」，版心「龍圖寶卷」。
- 16) 增像龍圖寶卷 二卷 一冊，下卷卷首「花柳良願龍圖寶卷」，版心「龍圖寶卷」，題簽「增像龍圖寶卷」，広記書局。〈備考〉上卷末尾二葉と下卷卷首五葉のみを残す。しかし版心の卷数は「卷三」と表示。
- 17) 花柳良願龍圖寶卷 一卷（上巻のみ）一冊，卷首「河南開封府花柳良願龍圖寶卷全集」，版心「良願卷」，題簽「良願龍圖寶卷全集」，瑪瑙經房。
- 18) 梅氏花網寶卷，二卷 二冊，卷首「湖廣荊州府永慶縣修行梅氏花網寶卷」，版心「花網」，題簽「梅氏花網寶卷」，杭州高麗寺印造流通。〈備考〉題簽の下に「□慶慧空□房流通」の語が見える。
- 19) 目蓮救母三世寶卷，三卷 一冊，卷首「繪圖目蓮救母三世寶卷」，版心「目蓮寶卷」，宏大善書局印行。
- 20) 目蓮三世寶卷，三卷 一冊，版心・題簽「目蓮寶卷」，見返「目蓮三世寶卷」，光緒丙戌（1886），常州培本堂善書局藏板。
- 21) 八寶雙鸞釵寶卷全集，二卷 二冊，卷首・版心・見返「八寶雙鸞釵寶卷」，題簽「八寶雙鸞釵寶卷全集」，上海文益書局石印。
- 22) 繪圖百花台寶卷，二卷 二冊，卷首「百花台雙恩寶卷」，版心「百花台寶卷」，見返・題簽「繪圖百花台寶卷」，民国6年（1917），上海文益書局。
- 23) 白蛇寶卷，二卷 二冊，卷首「浙江杭州府錢塘縣白蛇寶卷」，版心「白蛇寶卷」，見返「雷峰塔原本白蛇寶卷」。
- 24) 香山寶卷，二卷 二冊，卷首「觀世音菩薩本行經」，版心「香山卷」，題簽「大乘法寶香山寶卷」。
- 25) 雙珠鳳寶卷，二卷 二冊，卷首「正本雙珠鳳奇緣寶卷」，版心「雙珠鳳寶卷」，見返「繪圖雙珠鳳寶卷」，題簽「增像雙珠鳳寶卷」，廣記書局印行。
- 26) 雙珠鳳寶卷，二卷 二冊，卷首「正本雙珠鳳奇緣寶卷」，版心「雙珠鳳寶卷」，見返・題簽「繪圖雙珠鳳寶卷」，上海文元書局印行。
- 27) 唐僧寶卷，二卷 二冊，卷首・版心「唐僧寶卷」，見返「忍辱報夫仇繪圖唐僧寶卷」，上海惜陰書局印行。
- 28) 繪圖再生緣寶卷全集，二卷 二冊，卷首・版心「再生緣寶卷」，見返・題簽「繪圖再生緣寶卷」，上海惜陰書局印行。
- 29) 刺心寶卷 一卷 一冊，卷首「浙江嘉興府秀水縣刺心寶卷」，版心・見返「刺心寶卷」，民国19年（1930）桃月出版。
- 30) 延壽寶卷，一卷 一冊，卷首・版心「延壽寶卷」，六吉齋代印。
- 31) 花名寶卷 一卷 一冊。卷首「繪圖花名寶卷全集」，版心「花名寶卷」，見返に「皆大歡喜彌陀真經」とあり，「往生淨土神咒」「解結咒」「大悲咒」「般若密多心經」「觀音高王真經」「太陽經」「太陰經」「灶君出身真經」「孝子報父母感恩歌」「十月懷胎寶卷」等，附載の經名を挙げ，次頁に「改良花名寶卷」と題する。大觀書局印行。

（注）書名と順序は Library Catalogue of the School of Oriental and African Studies と First Supplement に依った。なお，これは書名に「寶卷」の語を含む著作のリストである。

（1996.3.31 執筆）